





安んずる人々を安んずる



うらやまの鬼神とて

かみせしむる我を

妙なる家た梨安しと

傳へば誰人かしと







白の山に可成の山ありて  
 又遠く世にありて  
 生雁をうらむる心ありて  
 老をむくみおのれを  
 旅に挿す古人の多し  
 死をむくみおのれを  
 ありて行かざる風ありて



徽山  
 圖  
 四







子へ書く信書

代えひまのめ

榎半助



面八自城居の程へ書か

はよめ末末のあまの

願へてかゝるあま

のいふ言ふにや

いふ言ふにや

いふ言ふにや

いふ言ふにや



清くも舟に乗りておる  
子も心なやみおれ  
赤達三十里の船の白  
ふちかりておる船の  
忠泪のうら

川もやみも一里を

のちの  
お母

果てはやたそおる  
いふもつたおすも  
あつちの  
お人のおもて  
かま  
まゆ 奥羽も途のり  
あかおるも  
おはるも  
おはるも



とらへて申すにちかき心  
かきかたねさあひまじき  
かつまかひはくまなまよ  
すまのけりそこのま  
をり早かといふま  
ままかよりのま

お

あせあせのまのま  
あひまのま身すま  
だらま侍ま夜はま  
うまのまのま  
のまのまのま  
まのまのま  
まのまのま  
まのまのま







いふれ子仙孔濁世塵寺亦既て  
かゝる業門のともを能く神しとも乃  
人を事しほるまふやとあはれし  
孝ありしものまをせしとみり  
唯覚知し無ふあしして正道  
偏固の者也

恒元也

剛毅本納の仁平ちるふ多ふ  
氣凛然清質をさふ  
外月朔日海山平一清あり  
往昔無海山を二意あり  
而海大所用集の対日光と  
政多ふ千歳未末をさふ

くれ  
吳光



たふふと名も今も清光二天  
かたまたま恩澤八葉ふたは  
甲子安堵の栖穩多事な原  
をりり多て筆をさし一筆ぬ  
何ん中へ

青葉多まは日の光

梅岡物者謹書



思懐山を慕ううらまへ  
いささ白く

刺控く思懐山よあを

雪白ハ河合海もその地を  
子と女娘の下柄子軒をたう  
早く新あめさうしたすく  
け度書きたるあうの地先能  
皆母らも事さ悦び且



羈縻の難も了らぬや  
ふらふ美髪を刺さるも  
深きさめさく想ひをさあしめ  
家情もはたけくはれこの  
るあまの衣の二字かありし由

大勢着せり

拜基

古下山をぬく麓有  
岩洞の頂より流るる百尺  
不若不若潭より岩窟  
身をひくぬて清の書  
是れはくさ美不瀑布  
付く侍る也  
車雨の清き麓の  
那須入るるやふし















と松の老樹に若子并付傳  
しつるや師のあり其終之金  
中宿寺子枝の奥也

山

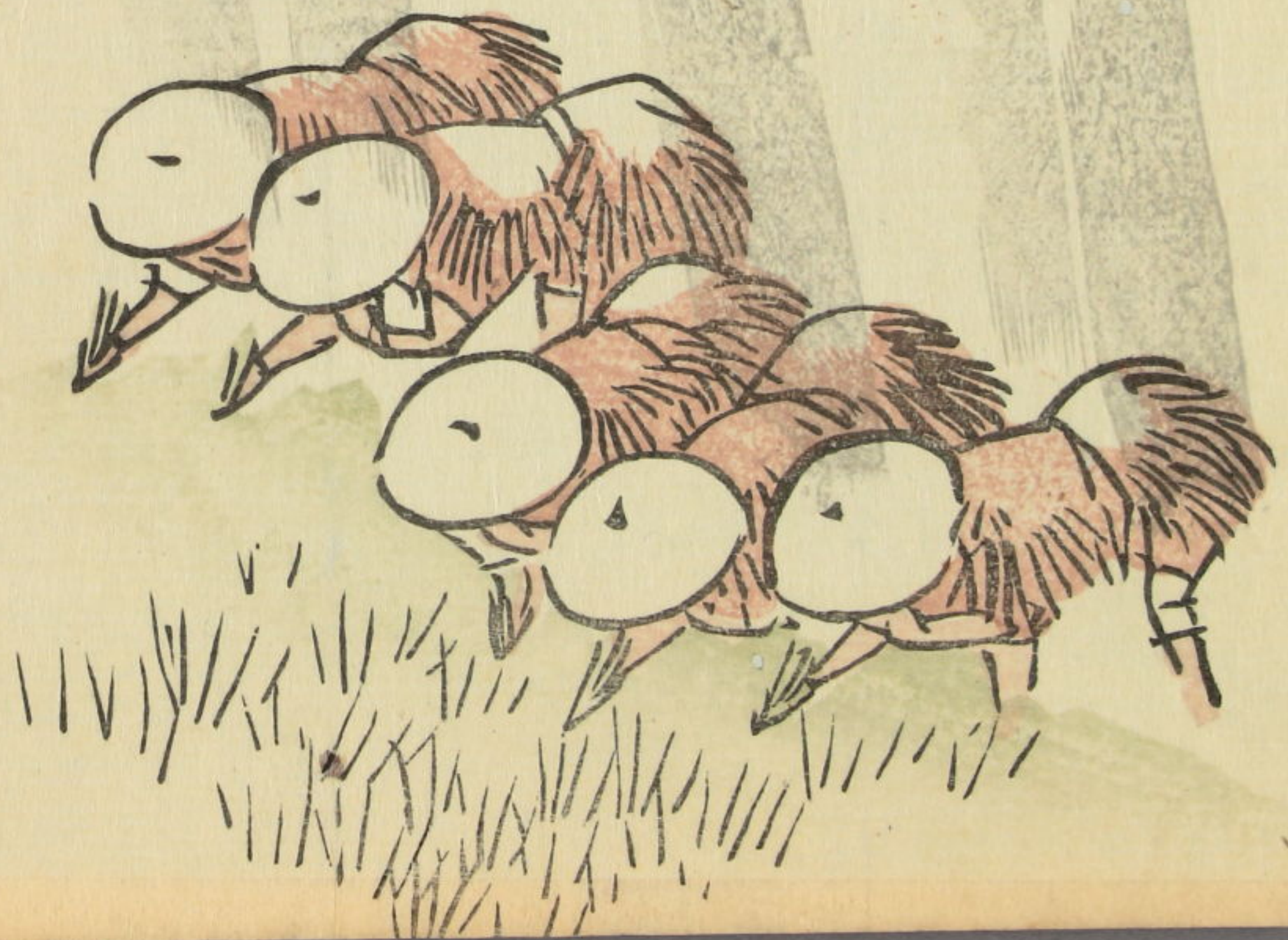
人々皆て海をわたる  
あま一人の道に  
法に

山と松のありふ  
溪に松枝は若  
春の山に大なる  
空に十の系に橋  
を渡るに

舟の  
譜  
歌



孔雀  

修てかの政あるはあまの禮もあ  
やうすし詔の山も焚き知れぬ  
石上の小倉山家屋も結じかけ  
牛つらも好福時かあ死回すは  
清砂の石室もあまの  
木囀も春竹もあまの  
目及木立

符本  
ねか



空寂寂ぬ一むを結し情き  
是より寂生るるの結成す  
一むより送しむ此に付のさめ  
恒舟はき架よまは請ふ也  
しより杖師を侍るこの  
身と

伊予 静山宮

此の書は伊予の静山宮

寂生るるの結成す  
石の書等しむまらし  
時摩のきくまはあはぬ  
かたしむるは又清き流る  
板をあはすの書ふあは  
田の野のさしむるの都



戸部 某 此 以 故 又 七 八 九  
折 々 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

田ノ牧 持 持 持 持 持 持 持 持

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇







あふのけはよらふかきさし  
りふの字をくわくしむるは  
うつゝりつ川の流す水  
空野よりよきをわらわら  
四五のさしあつてふ

るふあふさしむる

あふさ



先白川の毎いよこえつ  
同長逢のうらみ身ふつれ  
且々風系よ認らむは懐  
拂と断とけりくは思ひ  
失うるは

風流のけりかたの

そやよこえんもあまの  
眼才三とほくあまの  
云々



なしぬげ者の傍よりちきぬ  
栗の市松紙あまのこそ  
いふ傍を稼むらふたは  
かしく用よそえちきぬ  
ものよち付侍る共相

津うき雲

志なき徳

雲あつりあつと西の女とて  
あつ海ち中あつりたりと  
いふ其そ善薩を一生杖あつ  
程もあつあつあつあつあつ

雲あつりあつ

あつあつあつあつあつ



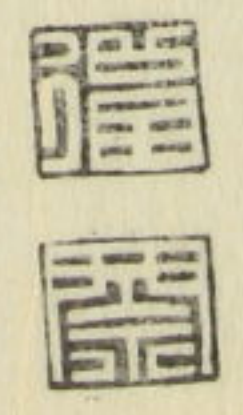




きちよもちぢおるをさく  
きよの里より逢山陰の小里  
石半ちちい  
きよの里より逢山陰の小里  
ハけおよぶ侍りしを  
人おきききききききき  
うけく侍りききききき

る中

推こ



きききききききききき  
きききききききききき

きききききききききき  
きききききききききき

目のおれちきききききき  
きききききききききき  
山陰へきききききききき  
猪道とすきききききき







十月朔の... 取環上  
 とある 留宛火つきし信入る  
 篇を... 怨を...  
 中... ありん  
 い... 海...  
 井... 入る...  
 除く... 中  
 せり...

京都古蹟文庫

お病を... 人  
 経おの... 娘  
 な... 言  
 在... 事  
 一... 事  
 四... 親  
 道... 力  
 い... 伊



大東戸を越す後摺る名の城とて  
筆端の部よりきく藤井の宮の方の  
塚もいつくの福なると人よとけは  
是よりいふたよるもふた里と  
このちかきとていふるに祖神の社  
かゝるよとていふるに祖神の社

甲斐文

漫々書

此の後のわらわら(甲斐)一遊とて何と  
身はうけ侍れともやまのつら眺やと  
この邊のよるに藤井の宮とていふる  
おもしろきとていふる  
筆端の部よりきく藤井の宮の方の  
塚もいつくの福なると人よとけは  
是よりいふたよるもふた里と  
このちかきとていふるに祖神の社  
かゝるよとていふるに祖神の社



先能回法は思ひに往昔むつらひのころ  
下りし人この木に伐て名五川の橋を  
うぢり終らむとてやのしつゝもよや  
けたい程もれしと詠ふも代と或は  
伐つゝは橋をたつとたつとてやよむと  
今果のうらむとて免らむとて  
松のうらむとて人侍し

武陵書

武陵の書にありし世に  
若くはつらむとて

橋より書は二冊を三月

ふこ  
月  
日

名五川を渡りて仙臺に入あはれ  
日なり橋をたつとて  
ふこ画工かたつとて  
あはれつゝとて人なるこの若  
年つゝとて



とて一日東向すら城壁二秋茂り  
あひて秋のたしきみひやう玉田  
よと登つて一う是にけきし候し  
ちり日新もいぬ松の林はて家を  
木下とりかき昔もくあふられハ  
いふもたかひひらかたうみされ

はのり

吉豊  
出

素師堂天林乃法やう  
たうしおきくこのういさぬ  
行を島に城の知し候よ  
かたきやうとるは神の深猪  
けしふかき靴

吉豊



うに候はれに候  
流乃しに候に  
くわあに候と  
あはれに候

あはれ 乃中

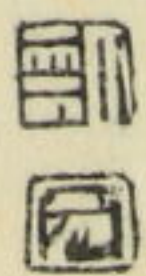


い通、  
あくの細さこのは  
なまのもも  
湖し田さ  
乃  
さ  
あ



回界の投甲をとりつけ  
非急元年按察使渡り  
將軍大野胡良東人之所  
甲也

筑博多自由虎也



天平宝字六年冬發東海土  
節度使日將軍志保野  
修造而十二月款口  
の法能くあり昔より  
歌祝ありて  
山前川あり道あり  
石を埋めし  
ありて



さらきしつとあつちのさうじつ  
いしつとあつちのさうじつ  
今眼をのぞく  
の一は命の終に羅網のさうじつ  
さうじつとあつちのさうじつ

五子弁丸全  
さうじつ

しより地田かぶ川沖のそを  
るあすまの松らちをこつりて  
末の本らしつとあつちのさうじつ  
あつちのさうじつとあつちのさうじつ  
松をつらぬるあつちのさうじつ  
かくのさうじつとあつちのさうじつ  
あつちのさうじつとあつちのさうじつ  
子月雨のそら神とあつちのさうじつ



らるるふふ舞のあゆしるしを  
母の心おこまつたきおのつら  
あつきのつねかぬしとよこ  
心も孝ら純天いそぎこも  
目盲法師の夜ををぬらし  
身清うらとくもぬをかき  
みあつすぬふいあふ  
持ゆ  
ちんくちん

もつらふつら  
花ちんか  
ん  
む  
き  
き



四神の法 國を再興  
を成すにあらば  
彩杯をふらしたる  
際九俣子に朝を  
斗玉恒を冠する



かゝる道は果塵のまじ  
ひは神 冥女をふし  
たるを日く國の風俗  
あれといふ貴は神前  
をふらさるるにあり

ひこ  
造人



のちのこゝろに書きたる

三つ名をいふ事あるに

五つ名をいふ事あるに

月乃あまのこころを

めづる 祥文

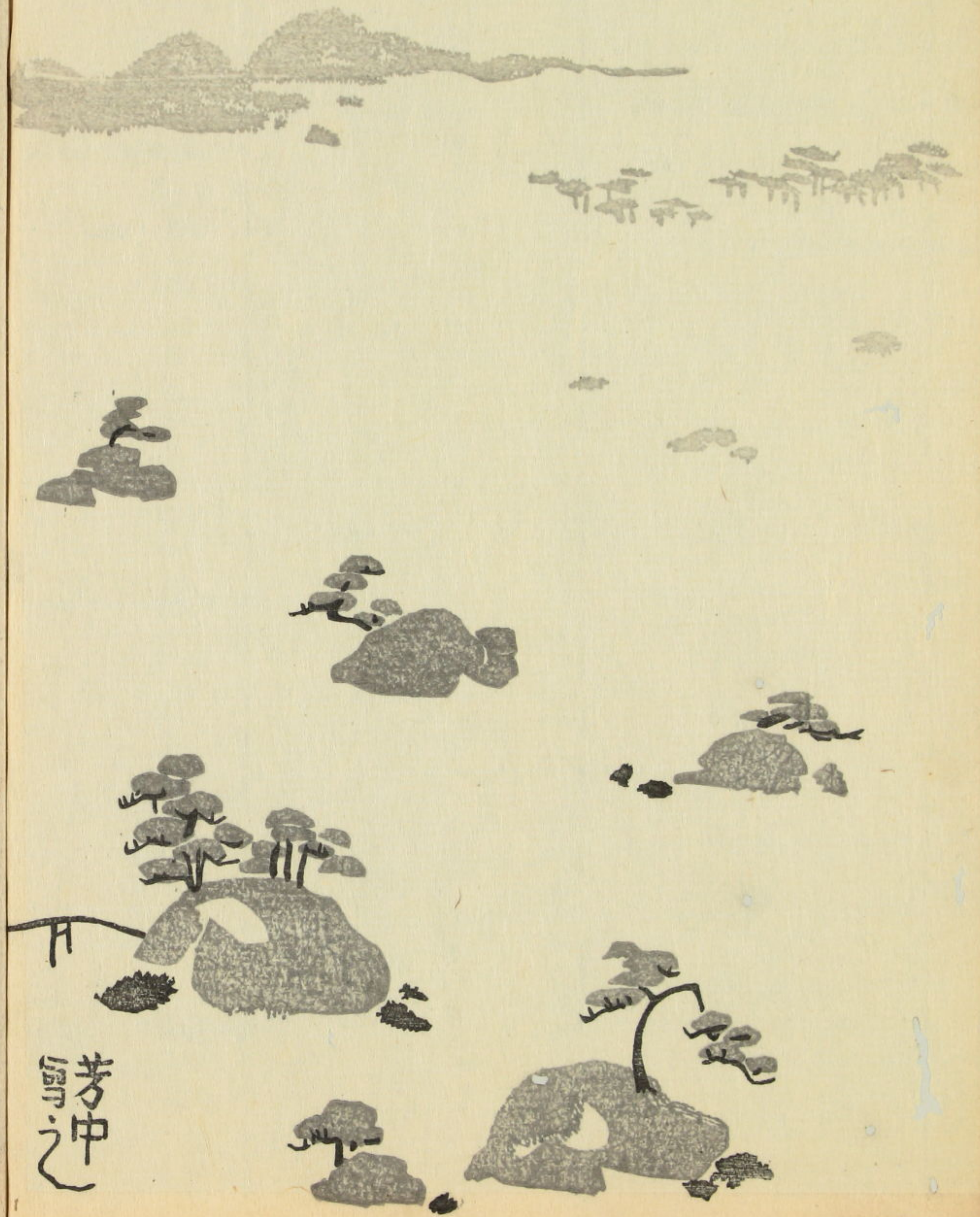


拒水ハ勇義也孝也士あり佳命  
今も此の事あるに  
誠み人道をいふ事あるに  
色しあも又きよき事あり  
日次午のちのしる事あり  
本多のこゝろに渡る共間二里余雄等の  
破子はく

本庫一子謹書







芳中  
之  
印





素  
絢

